

かわらばん

第26号 2019年6月20日



一番たしかなもの 『僕たちは希望という名の列車に乗った』を観て……平野卿子
99%フォーラム学習会「消費税減税・格差是正の税制改革とくらし安心社会への財政投資で
日本経済を再生せよ！」(講師：藤井 聡氏) 報告……羽立教江
「性別による差別は明らかに不正・不法 正当化できる理由は何もない」
医学部入試差別第一回口頭弁論 意見陳述書……角田由紀子
終わりにしよう天皇制！ 反天 WEEK—4.28 沖縄デー集会
「アキヒト天皇と沖縄」に参加して……村山千津子
「沖縄の元海兵隊員による性暴力殺害から3年 基地・軍隊はいらない！
4.29 集会」報告……丹羽雅代
静かな熱気と共感の満ちるなかで—6.11 フラワーデモ参加報告……村山千津子
原発再稼働と運転延長を止めるために～笠間市の小さな市民運動……三井ふみよ



一番たしかなもの

映画『僕たちは希望という名の列車に乗った』を観て

平野卿子

人間が勇敢な行動を起こす時、こ
とにそれが政治的な問題に関わりが
あつた場合は、とかくイデオロギー
が背後にあると思いがちだ。けれど
も、実際には必ずしもそうではな
い。『僕たちは希望という名の列車
に乗った』を見て改めてそう思った。

この作品は、ドイツが東西に分割
されていた時代に、東ドイツの高校
生テオとクルトのふたりが西ベルリ
ンに行くところから始まる。ちなみ
にこれは実話に基づいている。

(編集注：ここから先、あらすじが結末ま
で書かれています)

一九五六年の東ドイツ。市民の生
活はけつして自由とはいえ
ず、様々な制約を受けては
いたが、彼らはそれなりに
楽しい高校生活を送ってい
た。西側の映画館に行けば
女性の裸が見られるなどと
はしゃいでいるようなふつ
うの若者だったのだ。まだ

ベルリンの壁は築かれておらず、検
問はあつたが、申請すれば西へ行く
ことができた(壁が作られたのは
六一年)。

募参りを口実に西ベルリンに出か
けたふたりは映画館に行き、ニュー
ス映画で自由を求めるハンガリーの
民衆蜂起を知る(日本でもテレビが
普及する前は、映像によるニュース
は、映画館で併映されるニュース映
画だけだったのを思い出して感慨
があつた。わたしの高校時代には、
当時の渋谷東急文化会館の地下に
ニュース映画だけを上映する映画館
があつた。入場料は十円だったと記
憶している)。東ドイツでは、報道
規制がきびしく、正確な報道がされ
ていなかった。

ハンガリーの市民をソ連軍が襲撃
する光景を見て、二人は唾然とする。
共産主義者が共産主義者を弾圧して
いる——信じられない光景だった。
自由を求めるハンガリーの人たちに

共感したクルトは、犠牲者を悼むため、級友たちによびかけて授業中に二分間の黙祷をする。ところが、当時ソ連の支配下にあった東ドイツでは、この行為は国家反逆罪とみなされて大きな問題へと発展していく。ついに当局が調査に乗り出し、生徒たちに一週間以内に首謀者を言うように迫る。さもないければ全員退学させるというのだ。だが、だれも口を割ろうとしない。業を煮やした当局は、仲間割れさせようとしてひとりずつ尋問し、「首謀者の名前を言えば、おまえは見逃してやる」と持ちかける。

友を密告し、大学へ進んでエリートコースに乗るか、それとも信義を貫いて労働者として生きるか。だれもが深刻な決断を迫られる。この過



程で、それまで見えていなかったさまざまな事実があぶり出されていく。

テオとクルトは固い友情で結ばれていたが、家庭状況は異なり、テオの父親は労働者だが、クルトの父親は市議会議長だった。クルトの父親は、息子が首謀者だと知って怒りに震え、ほかのクラスメートの名を告げるように迫る。テオの父親は、息子には自分とは違う人生を歩ませたいと願っている。父親の気持ちを知ったテオの気持ちは揺れた。それをみて失望するガールフレンド。ナチスと闘った英雄だと信じていた父親が裏切り者だったと知ったクラスメート、エリックの衝撃。

当初はほんの軽い気持ちでしただけの黙祷。それははからずも国を巻き込んだ大きな事件となった。この後、事態は意外な方向へと進んでいく。ほとんどの学生が「首謀者は自分だ」と名乗りを上げるのだ。

弾圧がますます激しくなると呼びかける。おりしもクリスマスシーズンで、検問は緩くなっていた。少人数に分かれて逃げれば目立たずに済む。だが、真っ先に逃亡したク

ルトは検問で捕まってしまう。迎えに来た父親は、このまま家に連れ戻されると思っていたクルトに、さりげなくこういつて去っていく。「いいか。夕食までには戻って来いよ」。

こうしてクラスのほとんど全員が家族を捨て、国を捨てて西側へ逃亡し、彼の地で卒業試験を受けたのだった。原作となった手記を発表したクルトのモデル、ガルスカは、西ドイツの大学を出て高校教師となった。

この映画を観て、昨年日本で公開された『ヒトラーを欺いた黄色い星』を思い出した。これも実話による作品である。一九四三年ゲッベルスは、ベルリンからユダヤ人を一掃したと宣言したが、実はその時点で七、〇〇〇人のユダヤ人が潜伏していたという。それはドイツ人がかくまったからだ。そしてけっきょく一、五〇〇〇人のユダヤ人が生き延びたのだ。

ユダヤ人をかくまったドイツ人のほとんどは、反ヒトラーだったわけでもなく、組織的なレジスタンスの闘士だったわけでもない。本作品に

はレジスタンスに加わっていた人たちも登場するが、当時これに加わっていた人たちは極めて少数で、ほとんどの人間がナチスに賛成していた。かくまった人たちはごくふうのドイツ人。つい昨日まで自分たちが信頼し、親しくしていた家族が拉致されると知って、「本能的に」かくまったのだ。ヒューマニズムから。そして彼らを守ろうとした。おどろいたことに、なかには高級将校もいたという。

こういう事実を知ると、「人間にある本質的な善」を感じて、心が温かくなる。レジスタンスに加わって闘うのは誰にでもできることではない。一般の人間にはあまりにもハードルが高い。第一、当時多くのドイツ人は、ナチスに対して疑いを持っていなかったのだから。ユダヤ人をかくまったドイツ人たちは、ただ、親しい友人を護ろうとしただけだ。つまり「愛」と「友情」にこたえたのであって、そこにはイデオロギーはない。

『僕たちは……』の高校生たちも、もともと反体制だったわけでもなく、政治的人間だったわけでもない。けれども、ハンガリー動乱の実態を

知ったときに「同じ人間として」何かせずにいられなかった。それだけのことだ。しかしその「それだけのこと」が、実は極めて大きな意味を持つ。

イデオロギーは、時と場合によって変質するかもしれない。だが「同じ人間として」という土台から発した思いは、時代も性別も、立場も超える。そして、変わることがない。つまり「一番たしかなもの」なのだ。そんなことをいまさらのように感じさせられた作品だった。

☆僕たちは希望という名の列車に乗った (The silent Revolution 二〇一八年 ドイツ 一一一分) 各地で公開中。原作『沈黙する教室 一九五六年東ドイツ―自由のために国境を越えた高校生たちの真実の物語』デイトリッヒ・ガルスカ著 大川珠季訳 アルファベータブックス)



「九九%のための経済政策フォーラム (略称: 99フォーラム)」 第四回講演会 (二〇一九年五月二〇日)

消費税減税・格差是正の税制改革と

くらし安心社会への財政投資で日本経済を再生せよ!

講師 藤井 聡 (京都大学大学院教授、元内閣官房参与)

報告 羽立 教江

市民と野党の各議員が共に学んで、希望ある社会につながる経済政策を豊かに発展させる「九九%のための経済政策フォーラム」が発足して、約半年が過ぎました。

その間、運営委員会は、二〇一八年一〇月から一六回を重ね、講演会は、二〇一八年一二月の第一回から、五月二〇日の第四回まで実現しました。参加議員は、

党によっては政策調査会長、経済産業委員会代表をはじめ、立憲民主党、国民民主党、日本共産党、れいわ新選組など野党の多くが出揃い、メディアの関心も高くなりつつあります。参加市民も毎回一〇〇人を超え、熱心

な連続参加者も少なくありません。

参加市民からの、質問・アンケートは、毎回、講師の回答も添え、まとめたものを、会の概要とともに、約二〇〇人の野党議員の国会事務所
に直接、届けています。

以下、第四回講演会の概要を、ご報告いたします。

第4回学習会「消費税減税・格差是正の税制改革と、暮らし安心社会への財政投資で日本経済を再生せよ！」

消費税を凍結せよ！日本を豊かにする処方箋

学習会当日の午前中に、政府から一〇三月のGDP速報値が、年率プラス二・一％と発表され、茂木経済財政政策担当大臣が、早速、消費税増税を実施する旨の発言を行った。講師が開口一番取り上げたのもこのこと。「今回のGDPのプラス成長は、輸入の減少による単なるみせかけ上の数字である。輸入は名目値で一〇二・九兆円もあつたものが九四・七兆円に急落した。統計上、輸入はGDPから差し引かれる項目である。この輸入の急減がなければ、GDPはプラスどころか、名目で年率二・七％ものマイナスとなつていたはず。内需が冷え込み過ぎたため輸入が減少して、見かけ上の数字でプラスとなった。二〇一九年の経済危機の可能性が濃くなって、消費増税など、無理であることは明らかである」と語った。

以下、講演概要を紹介する。

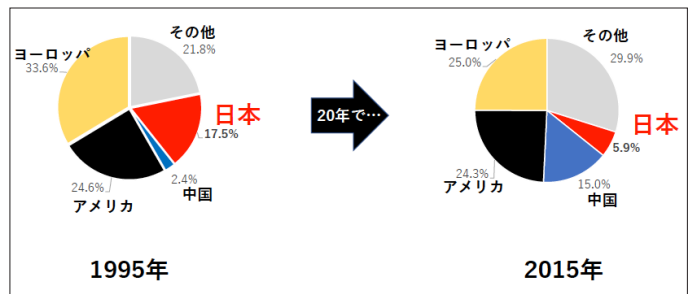
日本がなすべき3つの政策転換

- 反緊縮へのピボット⇨積極財政
- 反グローバルイズムへのピボット
- ⇨国民・国際主義
- 反構造改革へのピボット⇨保護・連帯主義

1. 衰退し続ける日本

今、日本は多くの国民の想像をはるかに上回る速度で、急激に「衰退し続けている」。世界中が成長しているなかで、日本だけが成長していない。一九九五年から二〇一五年までの二〇年間でみた場合、日本のみが、唯一、名目成長率がマイナスで（マイナス二％）、世界の主な七七國中、世界一かつ世界唯一の衰弱国家である。（七七か国の平均は一三・九％）

その結果、日本のプレゼンスを世界のGDPに占める日本のシェアで見ると一九九五年から二〇一五年の二〇年間で一七・五％から五・九％まで低下している。中国は二・四％から一五・〇％まで伸び、アメリカは二四％台の横這い維持。



2. 今、日本経済が激しく衰弱し続けているのは、何故か？

二〇一四年の八％への消費税増税は、日本国内の消費を一気に冷え込ませ、日本経済に激しいダメージをもたらした。さらに一九九七年の五％の消費税の場合は、もっとひどく、一九九七年からGDP、一世帯当たり国民所得が下降し、税収が軽減し、国債発行が急増した。二〇一四年の消費税増税のときも、その後三年間で、一世帯当たり消費支

出が三四万円も減少し、格差拡大が進んで国民は貧困化している。消費税増税のダメージは、本当はリーマンショック以上なのである。

3. 消費税が日本経済を衰弱させる二つの理由

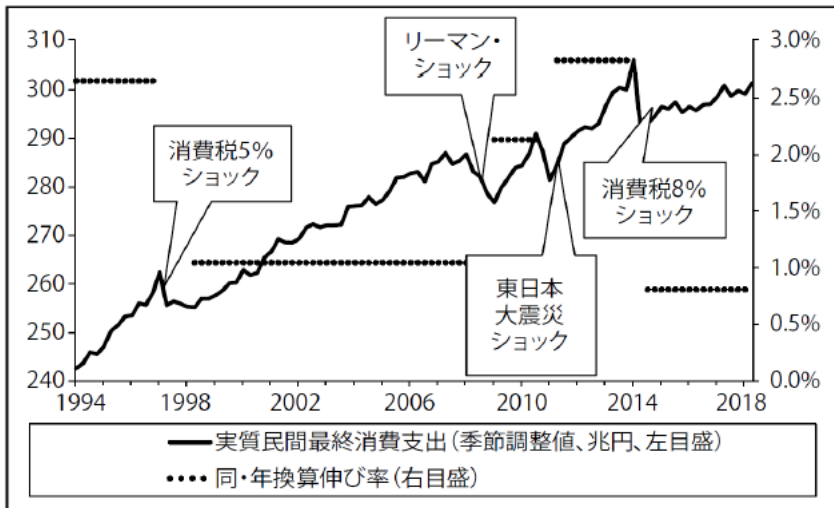
- 理由1 経済成長の最大のエンジンが消費であること。
- ・GDPの六割が消費。
- ・GDPの一五％を占める投資は消費に強く依存している。
- 理由2 消費税が、その「消費」に対する「罰金」として機能する。
- 理由3 不況でなければ、消費税の悪影響は軽減する（諸外国の多くは好況時に実施しているところが日本と違う）。

日本を衰弱させている元凶は、より正しくは消費税というよりも「緊縮経済」である。

4. 日本をダメにした真犯人は「緊縮&改革」である

緊縮経済下では「改革なしに成長なし」という思い込みが蔓延し、あらゆる業界で「規制緩和」「民営化」

実質民間最終消費支出の推移



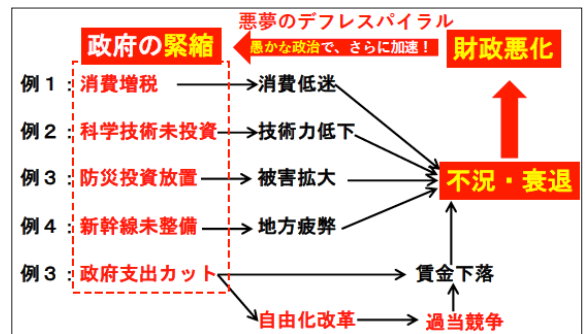
*内閣府統計より作成

*年換算伸び率は、ショックによる落ち込みが底打ちした四半期から、次のショックが起きた直前の四半期までの実質民間最終消費支出の伸び率を年換算したもの。(消費税5%ショックの前については、現基準での統計が開始されている1994年1-3月期から1997年1-3月期までの伸び率を年換算している)

「貿易自由化」「派遣労働規制の緩和」が進められ、その結果、「過当競争」が生じた(運送業・商店街・建設業・農業...)。その結果、物価がさらに下落し、「ブラック化」が蔓延し、賃金が下落し、不況がさらに拡大すると、悪循環経済に陥った。これは、経済の問題にとどまらな

い。長く続く不況で、自殺や過労死、医者にかかれぬなど人々の人生を狂わせている(たとえば自殺者数は、一九九七年消費増税以前と以後の一〇年間の年平均が二二、四一八人から三二、五六〇人で約一万人増加)。

「緊縮」austerityこそ、不況・衰退の原因



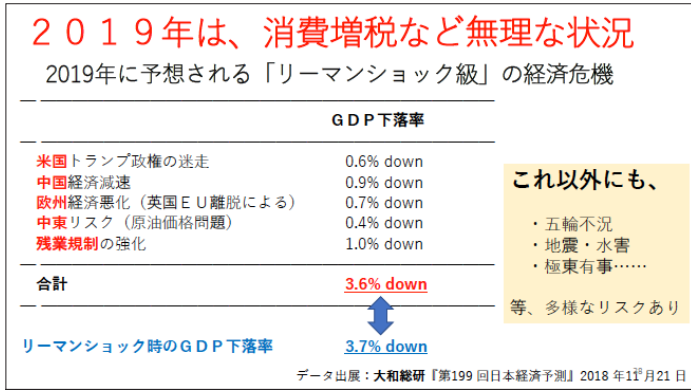
5. どうすれば日本は衰退から脱却できるか? グローバリズムに基づく「構造改革」から、「国民第一主義に基づく保護・連帯」へ三つの処方箋

- ① 税制改革
消費減税 + 法人増税 → 「緊縮」から「反緊縮」へ
- ② 財政政策
成長を促す様々な「政府投資」等 → 「緊縮」から「反緊縮」へ
- ③ 構造政策
賃上げ、物価上昇を促す制度設計 (移民促進法改訂、水道・空港・JR等再公営化、不当販売規制/適

正価格誘導、賃上げ税制、最低賃金を上げる、公務員拡大、介護等公定価格上昇、保護貿易強化、新会社法改訂(株主優遇制度の緩和・撤廃)、不適合業者の排除、農業補助助成金の増強、など

6. 反緊縮経済政策で景気拡大し経済成長し財政収支を改善した海外の事例とアベノミクスの実態

〈スウェーデン〉 保守中道から交代した中道左派政権(二〇一四年)による、人々のための大幅支出増で財政成長率が三・一%となり、財政収支が大幅黒字に(二〇一七年)。
 〈カナダ〉 保守党からの政権交代(自由党トルドー首相、二〇一五年)後、「財政赤字拡大」の財政運営で成長率が〇・九%から三・〇%(二〇一七年)。財政収支が二〇一八年四・九月期に黒字転換。
 〈ポルトガル〉 保守連合から社会党中心左派連合への政権交代(二〇一五年)による最低賃金・公務員給与・年金支給額アップなどの反緊縮政策財政で、経済成長率が政権交代前の〇・九%から二・五%となり、失業率・財政赤字が激減した。



これらと比較して、アベノミクスは「反緊縮」などといわれることがあるが、実態はまるで違って緊縮財政そのものである。

その理由は、

- ・ 税収から支出を差し引いた資金供給量は、安倍内閣の発足当初は四〇兆円だったがその後、激減させて、現在は一一兆円というマイナス財政である。
- ・ 二度にわたって消費増税をして、消費を抑制している。

・ 実質的に、消費増税が企業減税の原資となったのだが、企業は減税による利益を貯めこみ、設備投資など景気拡大のために活用していない。これで、デフレを脱却できるわけがない。安倍内閣は自称「アベノミクス」を全く実行していない。

プライマリーバランスをとるということのために、このような緊縮財政を行ってれば、かえって①格差社会や②福祉の貧困、GDPの下落率が三・六％に達するという予測がある。これは、リーマンショック時のGDP下落率三・七％ダウンに匹敵するものである。二〇二〇年以降はオリンピック不況のおそれもある。これらの要因による外需の急減、景気後退による実質賃金の下落がマインナスに働く。

上図で示す世界的といえるこのような景気後退予測に対し、IMF(国際通貨基金)は「金融状況の引き締めよりもリスク要因で、柔軟性ある財政と相まって、各国政府は鈍化しつつある経済成長を支え、支援する必要がある」と警鐘を鳴らしている。

繰り返すが、二〇一九年に消費増税など到底無理な状況である。

今回の講演に対する、多くの参加市民の感想は「あいまいさが無く、非常にわかりやすく面白く学ぶことができた」ということでした。資料もわかりやすく、話し方も表情も明るく、時折、関西弁もとびだして歯切れの良い話しぶりでした。

なお、第四回フォーラムの講演は、「九九％フォーラム」のホームページで視聴できます。

<https://99forum.jimdofree.com>

ホームページには、藤井聡教授と岩田規久男(上智大学・学習院大学名誉教授、前日銀副総裁)の呼びかけによる「消費増税のリスクに関する有識者のコメント」も掲載されていますので関心のある方はご覧ください。

なお、これまで四回の学習会(講演会)を実施してまいりましたが、七月の参議院選挙の関係もあり、次回(第五回)は、九月以降、場合によっては一〇月になる予定です。

四月の統一地方選挙が終わり、七月の参議院選挙も目前です。衆・参同時選挙の有無についての話題も飛



び交うようになりました。慌ただしい政治の季節がやってきます。

日本の将来に大きな影響を及ぼす国政選挙。そして、「あるべき経済政策とは」……。しっかりと眼を開き、耳をすまし、頭を働かせて、よりよい選択をしてゆきたいとの想いをあらたにする昨今です。「九九フォーラム」の成果が少しでも、反映される状況が出てきてくれることを期待しつつ……。

六月七日、東京医科大医学部の入試差別問題に関して、女性であることを理由に不利な扱いを受けて入試への信頼を裏切られたとして、不合格になった女性三六人が大学側に損害賠償を求めた訴訟の第一回口頭弁論が東京地裁で開かれました。女性たちの代理人として法廷にたった角田由紀子弁護士の見解陳述書をここに紹介します。

性別による差別は明らかに不正・不法 正当化できる理由は何もない

平成三十一年（ワ）第7175号、第10285号 損害賠償請求事件
東京地方裁判所 民事第二五部甲B
係 御中

意見陳述書

二〇一九年六月七日

原告ら訴訟代理人
弁護士 角田由紀子

二〇一八年八月初め、被告東京医科大学が、それまでの入学試験において数年にわたり、女子学生に対して、女子であるというその一点のみで、不正な得点操作を行い、女子の合格者数を少なくすることを

行ったことが発覚しました。このことが報道されると、多くの人々はその不正行為に憤りました。中でも一番ショックを受けたのは、言うまでもなく当の受験生とその親たちでした。発する言葉も見つからず、呆然としたということではなかったかと思われまます。私とその当事者であつたら、あるいはその親であつたらと思わずにはいられません。

日本では、大学入試は公正・公平に行われていると信じられておりました。女性であるということだけで女性がさまざまな不利益を受けることは、男女の賃金差別などに残念ながら日常的にみられます。しかし、女性差別を日常的に見てきた人々

あつても、それがこともあろうに、大学入試で、女性の合格者を少なくするという明確な目的の下、何年ももわたり行われていたことに、衝撃を受けました。そこにあったのは、連綿と続く明らかな女性差別でした。この社会の底には、憲法学者・辻村みよ子教授の言葉を借りれば「永久凍土」ともいうべき女性差別の厚い層が牢固として横たわっていたのです。憲法施行後、七一年を経過しているにもかかわらず、この「永久凍土」は、1ミリも溶けていなかった事実、原告をはじめ、人々は愕然とさせられました。

憲法一三条、一四条の定めた個人の尊重、性差別の禁止などは、被告にとつては、まさに「どこ吹く風」であつたのです。日本は、一九八五年に国連の「女性差別撤廃条約」を批准しており、この条約も日本社会を規律する法規範になっています。この条約一〇条a及びb項は、明確に女性に男性と同一の教育を受ける権利が保障されるべきことを定めております。

因みに、a項は、「あらゆる種類の教育施設における職業指導・修学の機会・資格取得のための同一条件

の確保」を定めていますし、b項は、「同一の教育課程、同一の試験、同一水準の資格を有する教育職員と同一の質の学校施設・設備を享受する機会が確保されねばならない」とうたっております。この条項では男性と女性に与えられる教育はあらゆる面で「同一であるべき」としていることが重要です。被告は、この条約を知らなかったのでしょうか。そうであれば、それは、大学という教育機関としては大きな怠慢であつたと非難されねばなりません。

被告の行ったことは、一言の弁明も許されない不法なことであります。

明らかな性差別によつて、不合格の結果を突きつけられた受験生の怒り、悔しさやそもそも差別的な試験を受けさせられたことへの憤りを適確に表すことのできる言葉は、ありません。今、ここでこう述べていても、受験生の女性たちのくやしさが思われまます。

日本では、入学試験において、不正がないことは当然の前提であり、受験生はそのことに一点の疑いも持たないで、合格を目指して懸命の努力をすることができるとです。本

件で原告となった女性たちは、それぞれの動機で医師となつて病氣の人々を助けたいとの深い志に支えられて、日夜勉学に励んできたのです。

原告たちは、不合格の結果に接したとき、その志ごと否定されたと思つたでしょう。原告たちは、その挫折を乗り越え、落胆しても、気を取り直してさらに勉学に励んできたのです。しかし、不合格は自分の力の問題ではなく、被告・大学の女性差別という最も非難されるべきことがもたらしたものであることが、明らかにしたとき、原告たちは、怒りを深め、その気持ちの持つていき場が見当たりませんでした。なぜ、こんな理不尽なことが、私に降りかかってきたのかと、悔し涙にくれた人がいたとしても、決して不思議ではありません。

被告は、いかなる正当化理由もあり得ない不正行為で、多くの若い女性たちの人生の大切な時間を奪いきり、その努力を踏みにじり、あるいはその自尊心を傷つけ、彼女たちに苦悩を強いたのです。被告の行つたこれらのことは、本来は金銭で償ふことはできません。しかし、現在の法制度の下では、原告

たちは、残念ながら損害賠償請求という形でしか、意思表示ができません。

今回の女性差別は、医師を養成する任務を負つた大学教授たちによつて行われましたが、そのことは、特に重大です。医師は、人の命を救うのが、仕事です。その仕事は、もつとも人権を尊重する仕事のはずです。今回の不正にかかわつた大学教授らは、いわば、人権侵害行為の先頭にたつていたと非難されても致し方がありません。事件発覚当時報道された被告側の弁明には、医療の現場は女性には厳しすぎて向かない、特に医師になりたての若い時期の女性は出産や育児の時期と重なり、長時間・過密労働に従事することが難しいので、不適格ということがありました。つまり、女性は大病院等での便利な労働力としては不適切ということであり、その不適な女性医師が増えては困るので、医師への入り口である医学部入学試験で女性の数を抑制しているのだということでした。正すべきは、若い女性が働き続けることができない医療現場の悪しき労働環境であり、女子学生の入学抑制ではないことは、明ら

かです。このことにも、被告の中で意思決定権を握っている教授たちの人権意識がいかに貧しいものかが現れています。人の命を救うことを使命とする医師が、人権感覚の乏しい人々によつて養成されるとは、大いなる矛盾です。

今回の事件は、直接には被告の問題ですが、被告の事案の発覚を受けて、他の大学の医学部でも同様な女性差別入試が行われていたことが分かつてきました。それ等の大学も女性差別の正当化理由を説明できませんでした。正当化できる女性差別などはあつてはならないことですから、当然です。昨年までの入試が明らかかな得点操作によつての女性排除であつたことは、今年度の医学部入試での合格者が男女同数か、大学によつては女性の方が多いという事実が証明しています。

原告たちは、裁判としては自分の救済を求めています。提訴することに伴う様々な困難と葛藤しながら、最終的には、女性差別は自分だけの問題ではないという理解の下に、今日を迎えました。原告たちは、自分たちが受けたような差別がなくなることを願っています。自分たち

の身に起きた不当なことを見過ごさずに声を上げることが、女性差別の再発防止の一助になると考えて原告になつた人もいます。

裁判所におかれましては、原告たちの正義―それは自分のためだけではありません―を求める気持ちをしっかりと受け止めて、それに応える裁判を行つて下さることを求めます。



終わりにしよう天皇制！

反天 WEEK — 四・二八沖繩デー集会

「アキヒト天皇と沖繩」に参加して

村山千津子

「アキヒト天皇と沖繩」

天野恵一氏(反天皇制運動連絡会)

「平和天皇」という自己演出

マスコミでは「アキヒトは沖繩に

心を寄せている」というが、ほんと

うか。アキヒト—安保—沖繩がつな

がっているという歴史がある。在位

三〇年式典の「おことば」にある「平

成が戦争のない時代だった」発言は

そもそも当たり前のことなのか。平

成は湾岸戦争から開始した時代では

なかったのか。もし同じことを安倍

たちが言っていたらメディアは違う

反応、対応だったのではないだろう

か。「平和天皇」という自己演出を

アキヒトは行っている。国民のこ

とを祈り追悼しているというが、こ

れは人間としておかしい。最近身近

な友人が亡くなったが本当にこたえ

る。その人一人のことを悼むのだっ

てたいへんなことであり、アキヒト

の大量の追悼はまったくの欺瞞に思

える。「象徴」としての「天皇の祈り」

といつて、務めを果たしている、次

の世代も続けてほしい、というが、

こんなこと誰も頼んでいない。天皇

の行為は憲法で定められた国事行為のみなのに、守るべき憲法をはみ出した活動である。これに対して憲法学者からの批判もない状況。天皇自身

が天皇の行為を決めている。

元号

元号に対しては安倍の決め方が

おかしいといった安倍への批判はあ

る。新元号の号外を発行したりして

元号フィーバーが作り出された。生

前退位の画策があったといえる。昭

和天皇死去の三〇年前は「喪」があ

ったが、今回は死去がない代替わり

で「祝意」一辺倒。昭和を超えた皇

室キャンペーンが繰り広げられた。

こういうふうになればあまり反発が

ないというふうな判断が正しかった。

一九四七年の天皇の沖繩メッセージ

沖繩メッセージとはアメリカの文

書から70年代に明らかにされたも

ので、沖繩を売り渡した、今日の基

地問題の原点である〔注：新憲法施

行からわずか四か月後の一九四七

年九月、昭和天皇が「米国が沖繩

に五〇年以上でも軍事占領を継続

するよう希望する」と伝えたメッ

今年の四月末から五月にかけて、

改元フィーバーをはじめとする天皇

退位、即位の狂騒に日本中が覆われ

てしまい、常軌を逸した奉祝ムード

が展開されるさまに、怒りを通り越

して気味の悪さを感じ、暗澹たる思

いに沈んでいた。新聞をはじめとし

たマスコミの「お祝い」報道はもち

ろんのこと、熱狂し、一般参賀に駆

けつける一四万の人々の姿を見るに

つけ、戦後七四年経とうというのに

日本にはついに民主主義が根づかな

かったのかと思わざるをえなかつ

た。目を覆い耳をふさぎたくなるよ

うなこんな状況のなか、反天皇制を

掲げる『終わりにしよう天皇制！

「代替わり反対ネットワーク」(お

わてんねつと)が四月二七日〜五

月一日にかけて「反天 week」と銘

打って連続集会・デモを行った。こ

の「おわてんねつと」のスローガン

は「元号いらない」「即位祝わない」

「ヒロヒトの侵略責任を忘れない」

「アキヒトの天皇制強化のための退

位反対」というもつともなもの。連

日の集会には一〇〇人以上の参加者

がつかい、最終日の五月一日、新

天皇即位の日(五月一日は天皇の日

ではなく労働者のためのメーデーの

日!)にぶつけて行われた銀座のデ

モには五〇〇人が集まったという。

これらの行動はマスコミには黙殺さ

れほとんど報道されることはなかつ

たが、少数勢力とはいえず、天皇制に

抵抗する民衆の運動が確かに存在し

ていることに救われるような思い

だ。

反天 weekの行動の中で四月二八

日に行われた「アキヒト天皇と沖繩」

と題した講演会に参加したので、以

下その概要を簡単に紹介したい。

セージ。明確な憲法違反の政治行為。一九七九年に外交文書が機密解除され、明らかとなった。沖繩の人々にとつての天皇制＝天皇の軍隊で、恨みつらみがある。ヒロヒトは

沖繩へ行ったかったが怖くて行けなかった。しかし、国の中に行けない地域があつてはいけない。ヒロヒトが行けなかった沖繩に気楽に行けるようにすることがアキヒトの一貫した目標であり、任務となつた。天皇制（国家）のなかに抱え込み直す。彼は沖繩には一一回訪問している。一九七五年の皇太子来沖反対闘争は、公務員組織の運動を含めて、火炎瓶を投げるといふ行動だけではまったく広範な大衆闘争だつた。しかし、このとき抗議の直接行動をしてのちに議員になつた人が、後年「あんなすばらしい人にひどいことをした」と述べるに至つてゐる。一九八七年に知花昌一さんが日の丸を焼いた時〔注：沖繩国体の時に強制された日の丸に抗議し、ソフトボール大会会場でスコアボードに登つて日の丸を引き下ろし焼き捨てた事件〕の救援会をしたが、このときは沖繩社会に叩かれた。それ以前の七五年に火炎瓶を投げた事件の時は

社会の受け止め方にはまだ寛大な部分があつた。この七五年から八七年の間に沖繩社会の抵抗力がなくなつてしまつた。

アキヒトと沖繩

沖繩戦を隠蔽し美しい言葉で語る。すでに沖繩は行けない場所ではなくなつた。「天皇の軍隊」の「天皇」と「軍隊」を切り離す。「天皇の軍隊」の記憶をなくそうとした。記憶の操作。「天皇」と「沖繩戦」を切り離すというイデオロギー操作。沖繩戦の被害は認めつつ天皇とは関係ないものとする。返還によつて米軍だけでなく自衛隊も来ることになつた。安倍にとつても「石を投げられない天皇」といふのは大切なこと。天皇は賛美され、人々は国家共同体の中で生きるといふ選択を強いられる。安倍―強硬、天皇―ソフトな形での二重植民地構造。持続化させて安定的に包摂するために天皇は不可欠。国家にとつて、安倍とアキヒトが同じ政治をしては意味がない。違う方法で沖繩を抑圧する。

天野さんのお話を聞いて、沖繩戦という悲劇をもたらした天皇の戦争責任、米軍基地を固定化・永久化した「天皇メツセージ」の戦後責任、そしてそれらを隠蔽するアキヒト天皇のパフォーマンスという、沖繩の戦前戦後を貫く天皇、天皇制の罪深さを思わずにはいられなかつた。

国会ではこの五月、新天皇の即位にあたり「天皇陛下におかせられましてはこの度、風薫る良き日にご即位になりましたことは誠に慶賀に堪えないところであります。天皇皇后両陛下のいよいよの御清祥と令和の御代の末永き弥栄をお祈り申し上げます」などという「賀詞」決議が、反対する政党もなく全会一致で賛成されるに至つた。政治の重しがなくなり、まるで戦中の「翼賛体制」を思わせるようなありさまだ。天皇教の儀式である大嘗祭に国民の血税が二七億円も使われるというが、大きな反対論は起こらない。それどころか反安倍を掲げる学者や文化人がアキヒトの「おことば」に感激し、憲法を尊重する天皇だとして評価・賛美するような倒錯した状況を呈している。気鋭の憲法学者が、「日ごろ、口汚く対立政党を批判する政治家

も、天皇陛下の前では、ののしり合いを躊躇するだろう」などと天皇制の「意義」を述べているのを読んで、その「天皇制民主主義」に仰天した。このように現状は深刻だが、「代替わり」の狂騒を目にして、天皇制を終わりにするための行動を継続していかなければならないとあらためて感じた。

最後に、五月一日の銀座デモにも参加した「私たちの戦争と平和資料館」(wam)のアピール「天皇制に終止符を」をリンクするので、ぜひお読みください。

<https://wam-peace.org/news/opinion/7582>



「沖縄の元海兵隊員による性暴力殺害から三年 基地・軍隊は変わらない！ 四・二九集会」報告

丹羽雅代

私がテレビを持たない生活を選択したのは、地デジ騒動の時。その選択がどんなに正しかったか、つくづく思う。退位だの即位だの、元号だの、新聞だけでもいやになるのに、画面からの情報は処理しきれないいろいろなことを引き起こしているようだ。なのになんか知りたい情報はほとんど出てこない。されたくもないのに、情報コントロールはしっかり貫徹しているみたいだ。その一つが沖縄に関すること、もう一つは性暴力。これは自分のアンテナをシャープしておくかなければ、目に触れないまま進行してしまう。知らなかったですませないためには、自前の情報網がどんなに大切か、改めて実感している。

去る四月二十九日、都内で実施された「沖縄の元海兵隊員による性暴力殺害から三年 基地・軍隊は変わらない！ 四・二九集会」の報告をした。参加者は一五〇人余り。女性が

圧倒的だが男性の参加者も少なくなかった。

昨年この集会は講師を引き受けていた高里鈴代さんが、辺野古の座り込みの際、鎖骨とろつ骨四本とを折って入院した直後で、急きよ講師を源ひろみさんが引き受けてくださっておまけに琉球舞踊も披露してくださいました。二年前は安次嶺美代子さん、そして今年はずっかり元氣になられた高里さんと、毎年沖縄から女性たちに来てもらっている。

「基地・軍隊を許さない行動する私たちの会」が出し続ける「米軍兵士による（沖縄女性の）性暴力加害年表」は、毎年更新されている。これは一九九五年に、どこにもないが必要だということで作られ始めた。新聞をずっと一九四五年までさかのぼって調べ、まとめたと聞いている。二〇年も前だったからできたけれど、今は到底難しいと彼女たちは話している。

三年前の二〇一六年四月二十八日、二〇歳の女性が元海兵隊員の軍属に性暴力を受け、殺害されて打ち捨てられていたうるま市の現場は、数日間遺体が見つからなかったことでもわかるように、人通りの少ない場所。現在はささやかな献花台が置かれ、多くの人が関心を持ち続けていることが知れた。しかも今年の四月一三日には、北谷町でやはり軍属によるDV殺人（加害者は自殺）も起きていた。

高里鈴代さんのお話

高里さんは、たくさん資料のパワーポイントと共に迫力を持って一時間半たっぷり話された。

そもそもは一九九五年の三米兵による少女レイプ事件、県民集会には八五、〇〇〇人が集まった。

これでは動かざるを得ないと、九六年SACO（沖縄に関する特別行動委員会）合意が結ばれ、世界一危険な普天間基地、北部訓練センターの過半が返還されるという話がまとまったかのように見えたが、進まない。どころか、高江や辺野古のひどさはみんなの知るところ。反対

運動が少しでもゆるんだら、すぐにひどい状況となる。土砂投入運搬用に、民間の棧橋を使うなど、全く歯止めはかけるつもりがない日本政府。おまけに赤土の大量混入（ドローン禁止の新しい法律も、不都合な真実を知らせないためといわれている）。

九五年以後、米軍は軍関係者が関わった性暴力などについて、毎年件数などを発表していたが二〇一一年からは全くなし。その理由は軍事機密にかかわることだから出さないとのこと。沖縄も含めて性暴力被害に人々の関心が薄れたとみて直ちに事件数自体が発表されなくなってしまうという。本当にびっくり。

そして日米地位協定の問題。

ドイツやイタリアなどの対米地位協定は最初はずっと日本と大差ないものだったが、世論の後押しもあり、交渉の結果、かなり変わってきて、ドイツでは子の養育責任なども厳しく書き込まれているとのこと、勿論それぞれの国の法律が優先される。

他方日本はどうか。日本の空が米軍支配下にあることはだんだん知られるようになってきた。特にオスプ

レイ配備がされ始めてから、夜中の騒音が全国的にひどい（私の住む多摩地域も横田基地の近くにあり、直近の人に聞くと特に明け方四時ごろがひどいそうだ）。

また、何度も出されては緩みを繰り返す米兵の勤務時間外行動規定（リバティ制度）が、今春大幅に緩和され、その直後の北谷町事件だったという。

七年前の復帰四〇年の際、沖縄のすべての市町村の長が名前を連ねて沖縄から建白書が出され、銀座をデモしたときのことを思い出した。私は高里さんと並んで歩いていたので、こんな光景は初めて見たと高里さんがひどく驚いていた。びつしりと向かい側の歩道に林立する日の丸。そしてヘイトスピーチも。沖縄は日本から出ていけ!! と言われて本当にびつくりしたとのこと（私は朝鮮学校問題や、慰安婦問題などで慣れっこになっていたせいかな、あまり怖いと思わなかったので、並んで歩く高里さんの表現がすごいなどとのんきに思っていた）。しかも安倍に渡す建白書などというネーミングがいかに古めかしいと私は内心

思っていたのだが、これも由来あることだったと後で知った。

県下のすべての市町村首長が足を運んだというのに、政府は全く無視。何も事態は変わらない、変えようという意思を持っていない。

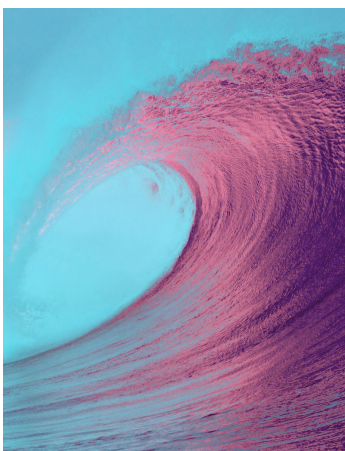
九五年の事件より以前に、同じような米兵による被害を受けた女性が、少女に起きた事件を知り、日本政府に自分の被害を打ち明け、自分が被害を他者に知らせないできたために彼女の被害が起これたと自分を責め、とにかく責任ある解決を、と手紙を送ったのだが、全く無視され、放置のまま。これが人権国家といえるわけがないと話を終えられた。

自分事として声を上げていこう

辺野古の新基地建設に固執する政府の方針は動かない。マヨネーズ地盤だの、九〇メートルまで杭を届かせなくてはならないのに、七〇メートルまでの技術しかないとか、信じられないような事態がいくらか明確になっても、何も動かない。日本維新の会を除名された丸山穂高衆院議員の乱暴さは言うまでもないが、彼の

発言のむちゃくちゃさと同じようなことが現実には沖縄で平然と進んでいる。人々の暮らしを脅かし、人権をなきものとしながら。

また性暴力をめぐるでも、ひどい事態が続いている。三月には立て続けに加害事実は認めながら加害者は無罪という判断が四件もあった。三件は控訴審へと移ったが、二〇一七年の刑法改正が、より厳しく抗拒不能を証明することを被害者に求めているように思える。被害女性たちの声を広げるべく、四月からフラワーデモが日本中に広がりつつある。進んできている沖縄、性暴力。自分事として女性たちがさらに声を上げていきたい。



「一票で変える女たちの会」かわらばん *印刷版をご希望の方は左記FAX、メール、ホームページの問合せ欄からご連絡ください。
★投稿大歓迎！

本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見なんでもお寄せください。（一本について二〇〇字〜二六〇〇字）

宛先：1pyodekaeru@gmail.com
郵便：〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックスNo.45
FAX：03-5684-1412

☆カンパのお願い
私たちの活動に賛同する皆さん、ぜひカンパを寄せていただきたく、お願いいたします！
郵便振替口座：00110-6-420003

記号番号 00110-6-420003
口座名称 一票で変える女たちの会
イッピョウデカエルオンナタチノカイ

銀行等から振り込む場合：
店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)店 (019)
預金種目 当座
口座番号 0420003



静かな熱気と 共感の満ちるなかで

村山千津子

性暴力と、性暴力への無罪判決に抗議するために四月から行われているフラワーデモ。六月一日には東京、札幌、仙台、鹿児島など全国一〇都市で開催されました。

東京駅前のフラワーデモには三〇〇人が集まり、夜七時から開始、九時を過ぎても話したいという人が次々と現れて、静かな熱気と共感に満ちた場となりました。

無罪判決への怒り、訴えた女性へのいたわりの声があったのはもちろんですが、マイクを握った誰もが自分自身のレイプや性被害の体験を語り、社会を変えよう、法律を変えよう、訴えたのが何よりも印象的でした。

よく集会で見かけるような人はあまりいなくて、全体に学生を中心に若い層が多いように感じました。といても中高年の女性や男性の姿もありました。

教師から性暴力を受けた女性は、その後教育委員会へ訴えたが取り合ってもらえず、その加害者はまだ現役で教師を続けている。自分だけでなくこれからの生徒や保護者のことを考えて裁判を起こしている。現在東京地裁で続いている裁判の傍聴に来てもらえたらとても励みになるので、ぜひ支えてほしい——と訴えていました。

この日は名古屋で二〇〇人、大阪、神戸で一〇〇人、福岡で一三〇人集まったといえます。数はまだまだ少ないですが、#MeToo運動は確実に広がっていますね。来月も一日に開催されるようです。

詳しくは以下で随時情報が発信されています。

https://twitter.com/_flowerdemo



東海第二原発の再稼働と 運転延長を止めるために 笠間市の小さな市民運動

三井ふみや

東海第二原発は運転開始後四〇年が経過した老朽原発だ。しかも二〇一一年の地震・津波で被災し、過酷事故寸前だったという。

いま、その原発の再稼働および二〇年の運転延長が計画され、原子力規制委員会も容認の方向にあると聞く。被災原発の修復、さらに新しく定められた追加安全基準を満たすには莫大な費用がかかる。テロ対策も必要だ。何より、再稼働には技術的に多くのリスクがあると専門家たちが指摘している。

一方、原発から三〇キロ圏内の住民約九四万人の避難計画は具体性も現実味も欠く。

電力は足りているというのに、採算が合うとは思えないコストをかけてまで、なぜ再稼働させようとしているのか。そもそもなぜ避難計画が必要になるようなものを使い続けなければいけないのか。

私の住む笠間市は一部が東海村

の原発から三〇キロ圏内に入る。二〇一一年の原発事故の際には、収穫期にあつたほうれん草などをトラクターでつぶさなければならなかったと近所の農家の人が嘆いていた。山菜のこしあぶらなどからはいまだに高い放射線量が検出されている。

この春、原発再稼働・運転延長の動きに、不安と怒りを募らせた市民たちが「ちょっと待った再稼働笠間市民の会」を発足させた。政治的立場などを問わず、再稼働に関心をもつ誰でも参加できる会だ。少しでも活動したいと私も加わった。

六月には市内三カ所でビデオ上映会を開いた。取り上げたのはチェルノブイリの原発事故後、ウクライナで子どもの健康を守るためにどんな取り組みが行われたかを紹介するドキュメンタリー『チェルノブイリ二八年目の子どもたち』。上映後には、感想や日頃抱えている思いなどを話しあつた。また再稼働の是非を問う県民投票実施の条例制定を求める活動への参加などこつこつ動いている。ごたぶんにもれず高齢者の多い集まりだが、できる人が動き、声を上げ続けなければ何も変わらないと思つてがんばっている。